

真穴の土地柄  
「北針」の精神

里に息づく進取の気性

個性豊かなミカンアルバイターは、小さな農村社会にとっていわば「異邦人」。それが不思議と日常にとけ込んでいる。真穴は、旅人を引き寄せて包み込む里でもある。



「おおらかさという一旗揚げよう」と北針か。いかげんという(羅針盤)を頼りに太か。アルバイター平洋を横断、58日をかの受け入れ組織「みかんの里雇用促進協議会」の会長松浦有毅(70)川八幡浜市真網代は笑って言葉をつなぐ。「それらは結局、「北針(きたはり)」の精神から生まれとるんよ」。「北針」とは地域で語り継がれる先人の偉業の物語。1913(大正2)年、真穴の浜から1隻の帆掛け船がひそかにこぎ出した。打瀬船(うたせぶね)と呼ばれる全長15メートルの船には、漁師や農家の若者15人。目的は渡米。包が届いた。ほかに

「異邦人」包むおらかさ

漂つちコロレトの甘い香り。「アメリカのにおい」のように感じたい。「かっこいいジャンパーや当時珍しい冷蔵庫もあった。真穴に行けばコーヒが飲める」ともいわれてものだ。里の歴史が培ってきた進取の気性。海を越えて同化する気質はまた、外から人を受け入れる素地でもある。アルバイター事業はそうして風土から生まれたと、松浦は考える。ミカン収穫の繁忙期。かつては大洲市や西予市など近隣の稲作農家から人手を集めてきた。しかし70年代ごろから、高齢化の影響などで目に見えて減っていた。アルバイターは今や「なくてはならぬ戦力」。と同時に、農村の営みの良さや真穴ミカンのおいしさも持ち帰ってほしい。外の世界に触れる機会が増えることは、地元の子もまたちにとって人間としての幅を広げる良い刺激にもなる。「だからホームステイが原則。地域がきちっと受け止めないと人間関係が生まれない。単なる労働者では寂しい話じゃ。アルバイターらが「真穴に来て良かったな」という社会をつくる。そう思うんよ」

説教され信頼関係実感

2009年11月4日 夜、東京・新宿のバーに男女5人の若者が集った。ミカンアルバイター経験者の同窓会。社勤め、農業、フリーターと進路はさまざまだが、昔のように一つのテーブルを囲んで近況を語り合う。ミカンアルバイター面接のため真穴から上京していた大下長久(67)が駆け付けた。草薙卓は酒が過ぎて大下

先輩アルバイターその後

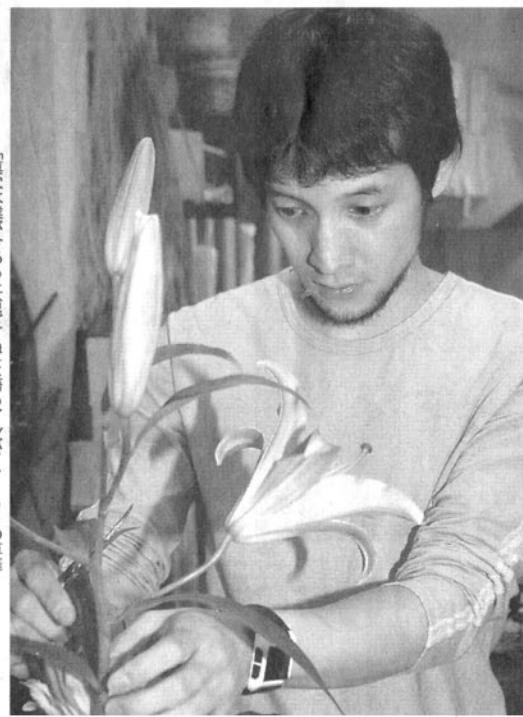
真穴の「お父ちゃん」たちは「山で会うと一切しゃべらないほどまじめ。でも酒が入ると本当に楽しんでいる。ギョウが面白かった。カッコいい彼らに真剣に説教され、心からかわいがられた。「人の運がいいんで、僕は、自分の足で歩いているんだ」と言い張ってたけど、真穴の人に会って「生かされているんだな」と

地元農家に婿入り

村田 優二(46)

消えつていた。

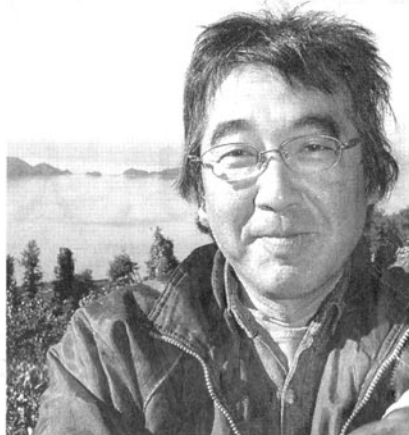
36歳からのフリーター。北海道で牧場の馬や牛の世話をしたり、サケの加工に従事したりと2年ほど渡り歩いた。アルバイト仲間から真穴のミカン収穫を知り、農家に直接掛け合せて1カ月余り働いた。縁あって地元農家に婿入りした。標高3000mの園地。



「真穴は僕が今ある土台です」と語るアルバイターOBの草薙卓

人生見直す旅の終着点

村田優二は、ミカンアルバイターがきっかけで農家を継いだ。真穴に定住したのは約8年前。流れ着いたというべきか。「いろいろ転機があってね」。人生を見直したいと始めた旅の終着点となった。東北に生まれ、東京の下町で育った。水回り関係など複数の会社を経営していたが「仕事すくめの毎日がいやになっちゃって。つばって生きていくことに疲れてね」。上を向いて歩けない日々。パブル景気もとうに



「ミカンの甘さにはれました。真穴に移り住んだ村田